

St. Luke's International University Repository

演習「生活の援助における看護技術の検討」の考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 育子, 津嶋, 優子, 木下, 幸代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/73

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



演習「生活の援助における 看護技術の検討」の考察

伊藤育子
津嶋優子
木下幸代

I. はじめに

看護学原理*の中の看護の基礎技術演習として、テーマ「生活の援助における看護技術の検討」を過去3年間にわたり行なって来たので今後の検討をするために、皆様のご批判をいただくことが出来ればと思い、その概要を報告する次第である。

基本的看護活動は、人間の欲求に基づくものであり、看護婦が行なう基本的な看護は、さまざまな状態の各人に対する援助活動である。初学者に対してここでは、V. Henderson が著書**の中で述べている「日常の生活の様式を守り得るように助けること(後略)」をもとに「生活の援助」と言う言葉で表現し、示した。

生活の援助の、初期の学習では、身体的なケアのための技術に関して、科学的な原理、原則と、基礎的な技術を習得させるために、学内実習を行っている。患者の条件設定をして、患者、看護者両方の立場から学ばせている。しかし時間の関係上、手順を一通り実施するという形式でなされることが多く、各自が理解を深めたり、発展させるところまではいかないのが現状である。

そこで生活の援助に関するクラスがほぼ終了した時点で、一つのテーマを選ばせ、実践を通し、理解を深めて発展させるためにこの演習を行わせている。

* 本学では看護学原理に看護概論、看護の変遷、看護の基礎技術を含めている。

この演習の目標は、看護技術の原理、原則の確認、あるいは科学的なうらづけを深め、よりよい方法を検討することである。この演習により、グループ学習の中での相互作用の効果と、各自が問題意識をもって積極的に取り組む態度を養うことを期待した。

尚、生活の援助における看護技術には、環境、栄養、安楽と休息、姿勢と運動、清潔、排泄を含めている。

II. 演習の概要

1) 時期および背景(図1参照)

(1) 昭和49年度学生(現1年生)

① 科目開講 第1学年昭和49年4月下旬

終講 第1学年昭和50年2月下旬

(臨床実習昭和50年度45時間
予定)

② 演習時期 第1学年昭和49年11月下旬 ~12月下旬(15時間と空時間9時間)

(2) 昭和48年度学生(現2学生)

① 科目開講 第1学年昭和48年5月上旬

終講 第2学年昭和49年4月下旬

(臨床実習昭和49年度45時間
終了)

② 演習時期 第1学年昭和49年1月上旬

** ヴァージニア ヘンダーソン著 湯横ます他訳: 看護の基本となるもの 日木看護協会出版部

図1 看護の基礎技術の進捗と演習時期

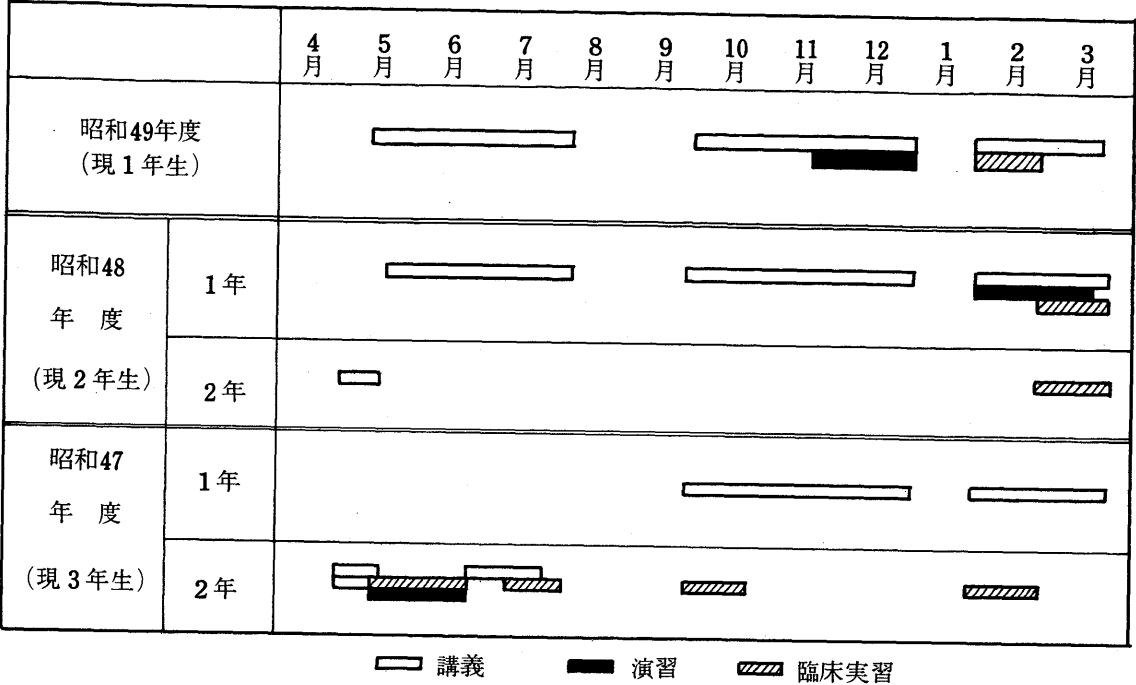


図2 昭和47年度(現3年生)グループ別演習期間

期 間 月/日 演習グループ				備 考
	4 / 28 ~ 5 / 10	5 / 14 ~ 5 / 23	5 / 24 ~ 6 / 2	
A. B. グループ				実習終了後演習
C. D. グループ				
E. F. Gグループ				演習終了後実習

演習期間 (32時間)
 実習期間 (16時間)

～2月下旬(24時間)

クラス6時間を残し、他は終了した時期であった。

(3) 昭和47年度学生(現3年生)

① 科目開講 第1学年昭和47年9月上旬

終講 第2学年昭和48年9月下旬

(臨床実習昭和48年度45時間
終了)

② 演習時期 第2学年昭和48年4月下旬

～6月上旬(32時間)

第1回臨床実習を3グループに分けて実施した期間に演習をグループにより図2のように計画し実施した。

2) 方 法

目的——看護技術のうらづけを科学的に行ない、学究的態度を養う。

目標——既に学んだ看護技術をひとつ選び実習を重ねて科学的なうらづけを深め、よりよい看護の方法を検討する

方法——演習の目的、目標を説明し、学生間でグループ及びテーマを決めさせた。1グループの人数は5～6人とさせた。学年によって、グループメンバーが先に決まったものと、テーマによりグループメンバーが決ったものがある。文献調査をふまえながら、テーマの設定(目的目標の確認)、演習方法(仮説の設定、実験実習の方法)を検討させた。実習又は実験観察を通して仮説の証明を行なわせ、まとめとして、各グループ毎にレポート(原稿用紙20枚以内)を提出させた。また演習終了後に、各学年とも2時間を使用して、全グループの発表を行

なわせた。

3) 昭和49年度の演習状況

(1) グループおよびテーマ

昭和49年度の学生(現1年生)45名は、9グループに分かれ次のテーマで演習をした。

Aグループ(5名) 全身清拭——皮膚に残留する石けん分について

Bグループ(5名) 同一体位の持続に関する考察

Cグループ(5名) 寝衣交換法

Dグループ(5名) 清拭時のお湯の温度の変化について

Eグループ(6名) 看護婦の身体の動かし方——Bed Makingの動作における

考察

Fグループ(6名) Bed上での患者の動かし方

Gグループ(5名) Bed Panのあたため方

Hグループ(4名) よりよい洗髪法をめざして

Iグループ(4名) 輸送方法の検討——ストレッチャーを中心に

(2) 演習の経過

「生活の援助」の各項目の講義と実習がほぼ終了した11月上旬に、演習のオリエンテーションをした。まず、興味のあるテーマを中心にグループができたが、最初からテーマと方向がはっきりしていたのは、2～3のグループのみで、途中でテーマを変えたグループもあり、演習内容が具体化するまでには、方向をいろいろ修正したグループが多い。演習時間として学生に示した時間は15時間で、この他に実習の裏時間*(こ

* 実習は数組に分けて行なうための空時間ができる。

の時実習室は使用できない)を約9時間配慮した。

実際に使用した演習時間は、最も少ないグループで16時間20分、多いグループでは30時間であり、平均では約24時間となっている。

演習期間は冬休み前の約6週間であり、正規の時間だけでは足りないグループは、放課後や始業前も利用して熱心に学習していた。

教師側は、1人が3グループずつを担当して助言指導した。

(3) 結 果

テーマの展開は、①ある技術を全体的に検討したもの(C・F・H・Iグループ)②部分的条件の実習から考察したもの(A・D・Gグループ)③看護婦の行動を考察したもの(Eグループ)④患者の立場の体験から考察したもの(Bグループ)の4つに大別される。

内容的には、清潔とボディメカニクスに関するものに集中した。

演習の内容を2・3紹介すると、Eグループではベッドを作る時の下シーツの引き入れ動作を中心に看護婦の身体の動かし方を考えている。VTRの使用や身体各部の測定により確認した各自の体型を基準とし、次にボディメカニクスの基本的原理に反した方法(手幅を広げる、膝を曲げない等)を5通り考えて実施し、考察した。具体的な実験により、ボディメカニクスの基本的原理と動作経済の法則を確認している。

①のある技術を全体的に検討したグループでは、いわゆる定説や新たに考えた方法をいくつか試みて、看護婦と患者両方の立場から検討し、最も安楽な方法を追求している。

また、Dグループでは、清拭時のお湯の温度変化を細かく調べ、一部位清拭する場合の温度下降は2.2℃であり、お湯をしぼれる限界は50℃であるから、3部位以上を続けて清拭するのは無理ではないかと推論している。

各グループとも、実験条件の設定、測定時の誤差、評価基準の客観化等にいくつかの問題を残しており、考察が十分できず、満足できる結論には至っていない。しかし、設定したテーマを実験実習によって解決するという過程をひととおり経験できた。

また、はじめての自主活動によるグループ学習であったため、どの学生も積極的に熱心に取り組んでいた。

4) 昭和48年度の演習状況

昭和48年度の学生(現2年生)45名は、次のテーマで演習を行なった。

- | | |
|-----------|-----------------|
| Aグループ(5名) | 洗髪法(特に洗髪車を利用して) |
| Bグループ(6名) | ベッド上における排尿時の体位 |
| Cグループ(6名) | 騒音について |
| Dグループ(6名) | ベッド上の掛物の種類と保温 |
| Eグループ(5名) | ベッド上での患者の動かし方 |
| Fグループ(6名) | 湯たんぽの保温力とカバーの種類 |
| Gグループ(6名) | 清拭の湯の温度の検討 |
| Hグループ(5名) | 食事介助 |

演習時間として学生に示した時間は24時間であったが、実際には課外時間も利用し、その約1.5

倍を使用した。

テーマの内容を大別すると、①患者の立場を体験し学習したもの(Bグループ)、②患者の立場の体験と看護技術の実習を通し学習したもの(A・E・Hグループ)、③部分をとりだし実験的に学習したもの(C・D・F・Gグループ)の3つになる。

①の患者の立場を体験し学習したBグループは、「ベッド上における排尿時の体位」の検討をした。仰臥位、半坐位、坐位及び正坐の各体位にて排尿を試み、メンバー6人が延べ24回の実験を行なった。排尿までに要した時間と、排尿後の残尿感の有無(その後トイレに行き残尿を確認する)をチェックし、①姿勢として安楽か ②精神的負担が少ないか ③排尿しやすいか ④看護婦の介助が簡単かの4点から検討した。演習の終りに学生たちは、ここで得た抵抗感、不快感の体験を今後の看護の態度に生かしていきたいと、述べている。これらの内容を全員の実習に計画するのは困難であり、学生の自主性を尊重したグループ学習であるからこそ可能である。他のグループのうち、③部分をとりだし実験的に学習したものの中には、発展性の少ない内容もあった。これは、テーマそのものが臨床等で現在あまり問題でないため、演習の意義がうすれたものである。

教師はグループを分担し、指導する体制にしたが、他の学年の臨床実習指導と並行したため、学生と話合う時間がとりにくく、テーマの設定や方向づけへの指導は充分ではなかった。しかし、どのグループも学生の姿勢は大変意欲的で、各々「患者をより安楽にするため」を目指し、各技術の検討にとりくんだ。

5) 昭和 47 年度の演習状況

* 市販の入浴用の製品

** 学生の考案によるもの

この学年は先に述べたように臨床実習の関係で演習の時期が3つに分れた。テーマ選択についてはグループによって着眼点異なる傾向がみられた。

1. 実習前のグループ (以下1群と略す)

Aグループ ウォッシュクロスの材質について

Bグループ コミュニケーション

2. 実習の前後に演習期間のあったグループ (以下2群と略す)

Cグループ 安楽な体位を科学的に考える

Dグループ 体位による種々の食事の患者にとって最も安楽な与え方

3. 実習後のグループ (以下3群と略す)

Eグループ 洗髪法

Fグループ 血圧測定

Gグループ 臨床における正しい体温測定値を得るために。

1群では、ある部分をとりあげ実験的に学習したもの、患者の立場から学習したものであった。Aグループでは、ウォッシュクロスの材質について、経済性、耐久性について、操作に関する実験(しぼりやすさ、巻きやすさ、拭きやすさ、石けん分の拭きとりやすさ)から、拭かれた時の気持よさと保温性について検討した。材質については、タオル、手拭ガーゼ、ナイロン*、スポンジ、ヘチマ、片面をタオル、片面にナイロンをぬいあわせたもの**を用いた。患者の好みにもよるが現在使用しているタオルの材質が良かったという結果を得ている。

2、3群では、臨床実習16時間終了後であり、患者の立場を体験学習したもの、看護技術を通し

学習したものであった。

E グループでは、洗髪については、各自がいくらかの自信を持ち得たのはたしかであると述べている。

F グループでは、臨床実習後、血圧測定技術の未熟さを痛感した。この演習で測定条件を設定し、実験実習を重ねて測定について自信を得ている。

生活の援助にとどまらず広いテーマになって実施したが、結果的には、臨床実習後の学生の問題意識から発展したものであり、意欲的に取り組んでいた。また演習を通し、各自が実習を重ねたので、技術に自信を得ている。グループにより時期の条件が異ったが、施設利用の点では、人数が少なくなり、支障なく終了した。教師は、臨床実習と重なり、最少限の時間で、相談に応じたに留まり、十分指導ができない状態であった。

III 演習に対する学生の反応

この演習について、学生がどのように受けとめているかを知るために、3学年全員に対し、昭和50年1月中旬、アンケート調査を実施した。

1) 調査内容

アンケートの項目は次のとおりである。

問1 しておいて良かったと思いますか。

(1年生は演習の直後なので除いた)

問2 演習をしてみて、満足感がありましたか。

問3 興味をもって意欲的に取り組むことができましたか。

この他に、時間、時期、設備等に関する意見を自由に書いてもらった。

また学年別に次の項目をつけ加えた。

問4 (対象-3年生)臨床実習において演習を深めることができましたか。

問5 (対象-2年生)演習したことが、その後の学習に役立ちましたか。

問6 (対象-1年生)演習を展開するうえでむずかしかった部分はどこですか。

なお、回収率は98.3%であった。

2) 調査結果

おもな調査結果は表1のとおりである。

2年生では問1に対し「しておいて良かった」と答えた学生がほとんどのグループ(I群とする)とそうでないグループ(II群とする)の2つの傾向がみられるが、他学年ではグループ間の特徴的な差はない。

2年生でI群に属するのはA・B・E・Hの4グループで解答数は20、II群に属するのはC・D・F・Gの4グループで解答数は22である。

(1) 意義の認識について

問1に対しては、2、3年生あわせて85名の学生のうち66名、77.6%が「しておいて良かった」あるいは「もっと深めておけばよかった」と答え、演習の意義を認めている。しかし、2年生II群では22名中、10名の学生が「しなくてもよかった」としている。

(2) 満足感について

満足感に関しては、3学年130名の学生のうち91名、70%の学生が「満足」または「ほぼ満足」と答えている。この間でも2年生II群の学生の満足感は36.4%と低くでている。

満足した理由としては「グループワークが有意義であった」「やったという充分感がある」の

表1 演習に対する学生の反応

() 内は%

項目		学年または群 (人数)	全 体 (130名)	3 年 生 (43名)	2 年 生 (42名)	1 年 生 (45名)	2 年 生	
							I 群 (20名)	II 群 (22名)
意義 の 認 識	しておいて良かった もっと深めておけばよかった	66名 (77.6)	38名 (88.4)	28名 (66.7)		19名 (95.0)	9 名 (40.9)	
	しなくてもよかった	10 (11.8)		10 (23.8)			10 (45.5)	
	回 答 な し	9 (10.6)	5 (11.6)	4 (9.5)		1 (5.0)	3 (45.5)	
満 足 感	満 足 し た ほぼ満足した	91 (70.0)	33 (76.7)	25 (59.5)	33 (73.3)	17 (85.0)	8 (36.4)	
	満足できなかった	38 (29.2)	10 (23.3)	16 (38.1)	12 (26.7)	3 (15.0)	13 (59.1)	
	回 答 な し	1 (0.8)		1 (2.4)			1 (4.5)	
興 味・ 意 欲	興味をもって 意欲的にできた	102 (78.5)	40 (93.0)	27 (64.3)	35 (77.8)	18 (90.0)	9 (40.9)	
	理 由	グループワーク であったため	38 (29.2)	12 (27.9)	5 (11.9)	21 (46.7)	3 (15.0)	2 (9.1)
		実験的実習 であったため	64 (49.2)	26 (60.5)	18 (42.9)	20 (44.4)	12 (60.0)	6 (27.3)
		テーマ自体に 興味がもてたため	54 (41.5)	22 (51.2)	13 (31.0)	19 (42.2)	10 (50.0)	3 (13.6)
	グループワークのため やりにくかった	8 (6.2)	2 (4.7)	1 (2.4)	6 (13.3)	1 (5.0)		
	実験的実習に 興味がもてなかった	1 (0.8)			1 (2.2)			
	選んだテーマに 興味がもてなかった	13 (10.0)		10 (23.8)	3 (6.7)	2 (10.0)	8 (36.4)	
時 間	時間的にゆとりがなく 思うようにできなかった	66 (50.8)	18 (41.9)	24 (57.1)	24 (53.3)	11 (55.0)	13 (59.1)	

*「意義の認識」の項目に関しては85名である。

2点が多くあげられている。また、満足できなかった理由としては、「研究方法の不備や時間の制約等により、十分に深めることができなかったため」がほとんどである。

(3) 興味・意欲について

興味と意欲に関しては、全体的には102名78.5%の学生が「意欲的にできた」と答えている。

何に興味ももてたかについては表1のとおりであり、学年全体ではそれぞれ50%弱に平均化されているが、グループ間ではバラツキが大きい。1年生を例にとると、B、Eグループでは、その理由として「グループワークであったため」が多くあげられているのに対し、D、F、Iグループでは「実験的実習であったため」が多い。

(4) その後の活用について（2、3年生）

問4に対しては、3年生43名中、24名が、「臨床実習において、演習を深めることができた」と答え、18名は「再度、技術面を深めたい」としている。

2年生を対象にした問5では、I群とII群に大きな差がみられる。「役に立った」と答えた学生は、I群で20名中、17名であるのに対し、II群では0である。また「他のグループのした事が参考になった」という学生は、I・II群あわせて20名いるが、参考になったテーマは「排尿時の体位」が9、「洗髪法」が8とI群のものに集中している。

(5) 演習の展開方法について（1年生のみ）

問7では演習の展開を、グループの結成からレポート作成まで8段階に分けて、むずかしかった部分とその理由を聞いた。この問ではグループ間の差もいちじるしいが、同じグループ内でも、各メンバーの意見は千差万別なので、特徴的なことだけ述べる。

最も多いのは、テーマの設定（目的・目標の確認）で45名中23名が「むずかしい」と答えている。テーマ内容のはっきりしているグループ（H・I）では誰もあげていないが、C・D・Gグループではほぼ全員があげ、「どのようなテーマが適当なのかわからなかった」、「目標をしぼるのがむずかしかった」等を理由として述べている。文献調査については、9グループ中、C・E・G・H・Iの5グループが「文献がほとんどなかった」と述べている。実験（実習）については18名があげ、むずかしかった理由としては「正確な測定が困難」「時間の制約がありデータが少な

い」「主観が影響し個人差が生じた」等があった。

この他、45名のうち17名が考察およびまとめを、14名が仮説の設定、あるいはレポート作成をあげている。

(6) 時間について

各学年とも約半数の学生が「時間的にゆとりがなく思うようにできなかった」と答えている（表1参照）。自由記載の欄でも「演習時間をもっとほしい」という意見が多いが、「時間的には適当」と答えた学生も少数いる。

また「他のグループの結果も十分検討できるように、発表時間を多くとってほしい」という意見が2、3年生からでている。

(7) その他の意見

1年生からは、時間にも関連するが「課外でやろうとしても実習室が空いていない場合が多い」「実習室のベッド数が足りない」等、施設の問題が指摘されている。

3年生からは「教師の援助がもっとほしかった」という意見があった。

この他、「演習をもっと積極的に取り入れてほしい」「演習の内容を誰もが利用できるように公開してほしい」等の意見があった。

3) ま と め

全体的にみて、どの学年の学生も演習に興味をもち、意欲的に取り組んで、その過程や結果から、ある程度の満足感を得たといえる。

昭和48年度のII群だけがやや異なる結果となっているが、これはテーマが演習にふさわしかったかどうかに関係している。

また、時間の調整と設備に関する問題や、テーマ設定と方向づけがむずかしかったことが指摘さ

れている。

IV. 考察及び今後の方向

1) テーマ設定と方向づけ

過去3年間における学生のテーマ展開は、次のように分類できる。

- ① ある技術の全体をとらえて検討するもの
 - a 患者の立場を体験することから学ぶ
(「ベッド上の排尿時の体位」「安楽な体位の保持」等)
 - b 技術の実習及び患者の立場の体験の両サイドから学ぶ
(「洗髪法」「食事介助」等)
- ② ある技術の部分をとらえて検討するもの
 - a 部分的な技術の実習及び患者の立場の体験の両サイドから学ぶ
(「便器のあたため方」「ウォッシュクロスの材質について」等)
 - b 部分的な技術の実習から学ぶ
(「看護婦の身体の動かし方」等)
 - c 部分的条件をとらえて実験及び観察をして学ぶ
(「騒音について」「清拭の湯の温度」等)

これらのテーマ展開の種類によって、演習の効果は異なるのだが、演習目標が達成できるよう方向づけられれば、どの分類にあたるものでもよいと考える。ただ、テーマの内容として、今後の学習に役立てられるものが望ましく、それはすなわち、看護の現場で有用な技術であり価値ある資料となるか、にもよる。そのために、臨床実習を1度も経験していない時期の学生に対して援助は必要で、学生自身の問題意識や学習上の興味を尊重した上で、ある程度の意義ある結果を導くため、具体的指導を行ないたい。例年何グループかは、演

習目標に対してあまり適切でないテーマ設定をしたり、また、テーマの設定が大変難しかったとの意見も多い。今後は、具体例をいくつか与え選ばれるか、又は問題点をなげかけて、それらを参考にテーマ設定をさせ、具体的な方向づけへの援助を、より積極的にしたいと考える。

2) 演習の方法

テーマの設定とともに、学生にとって困難であったのが、仮説の設定、実験方法の決定及び考察を、如何に科学的に行なうかということであった。科目「看護研究Ⅰ」は、2年次に教授されるから、この演習の時点で、仮説の意味、実験結果の読みとり、考察、特に主観的データを客観的に処理する方法等に関しての指導を要する。

3) 発表

発表時間は例年2時間であったが、時間不足、準備不足等で、この場での学生間の内容の交換は充分とはいえないが、よい質疑応答もいくつかあり、印象に残る結果は浸透した。

今後はグループ数にもよるが、発表時間として3～4時間を予定したい。また発表のための準備をするよう指導し、演習のサマリーのプリント、発表のための掲示物、デモンストレーション等の活用をすすめたい。

尚、司会進行は例年通り学生にまかせ、活撥に質疑応答をさせ、効果をあげたいと考える。

4) 演習時間

時間不足を訴える学生が多かったが、中には、計画をきちんとたて決められた時間内で終了させたグループもあった。時間不足というのは総時間数の多少の問題ではなく、時間帯や、たまたま演習の時期に大学や学生自治会の行事のため実習室

が講堂として使用されることが多く、課外時間に自由に利用できなかったという事情にも原因している。

時間割上に演習時間として示す時間は、従来通りの6週間前後にわたっての20~30時間とし、テーマ設定から発表の準備までを組み入れた計画を予めたてるよう助言を要する。

5) その他

事後の問題として、演習結果の利用がある。あるものは教育上の資料としてきたが、結果によっては、医療器機器具の改善のための意見等は業者に、看護の方法の改善や、うらずけのための意義のあるデータは実習病棟へ反映させる必要がある。

設備上の問題として、実習室があげられる。現在ベッド10台の実習室を使用しているが、ある時期に実験実習が集中しやすく、調整がむずかしい。実習室を大学の行事等に使用することもあり、準備かたづけのため数日間使用できなくなる。それでこれらの問題の解決の1つとして、小実習室の新たな設置が必要であると考える。

V. お わ り に

過去3年間にわたり行なってきた「生活の援助における看護技術の検討」の演習に対する学生の取り組みは非常に意欲的であった。演習結果に関しては、原理、原則あるいは定説の確認にとどまるグループが多かったが、体験することより、技術の習得には役だっている。演習の経過の中では、問題意識をもって、熱心に学習し、グループ学習の意義を見い出している。また仮説をたてて、実証するという実験実習の方法の学習という点で

も、ある程度の効果をあげている。この考察から指導上いくつかの課題を得たので、今後検討を重ねてこの演習を続けて行きたい。

Experimental Learning in Groups on Basic Nursing Techniques

Ikuko Ito, et al.

So many nursing activities seem to be very simple until adjustment to the particular requirement of the patient makes them complex. In order to acquire the ability to give individual care, the first year students have to learn scientific principles and basic technical skills at college.

We have given instruction in practice in Art's room, according to nursing procedures, on almost all teaching items, for limited hours. Therefore we have given exercise to our students for three years; the subject was the study of principles and methods of basic nursing techniques.

When the class was almost over, students divided into groups of 6 or 7 members by themselves, and were given exercise to confirm the principles of one nursing technique that was selected by each group after which they discussed how to do good nursing action. The students have learned by problem-solving approach through exercise in Art's room (experiments or observations), then wrote papers and had time to exchange reports among the groups and to discuss the problems.

The reaction of the students was very good. They were interested in the experimental exercise and group work methods, and were satisfied with this learning. We noticed the effectiveness of this experimental learning in groups, by which they learned scientific-thinking on basic nursing techniques, creative problem-solving, group belongingness, leadership and group development. For studying some problems for instruction in setting up a subject and objectives, etc, we will continue this method.